



## 土からの平和

Peace from the Soil

来年に控えるアジア学院50周年に向けたビジョンの一つ、「土からの平和」。アジア学院が描き実践する独自の平和の形を、世界の至る所で戦争や内戦が続く今この時代だからこそ、お伝えします。

### 平和と和解のリーダーシップ

ティモティ・B・アパウ(チャブレン、共同体生活、畜産)

アジア学院はキリストの愛に根ざしていると言いますが、これはどういう意味でしょうか。創設者の高見敏弘先生は人が和解し合う場を作りたかったのだと思います。なぜなら、キリストがこの世にいられたのは和解のためであり、キリストの愛とは言葉だけでなく実践すべきものだからです。世界中から来た様々な人が共に暮らし、食事をし、語り合うアジア学院では、平和と和解が人々の心に根を下ろします。

アジア学院にはあまり語られることのない隠れたテーマがあります。それは「赦し」です。この多様で濃密なコミュニティでは衝突や誤解は必ず起こるものです。そこでは、赦し合うことが平和と和解をもたらすために絶対に欠かせない道なのです。

研修の重要な点はコミュニティでの生活です。研修は教室にとどまらず、自然や人とのつながりを通じて行われます。例えば、異なる大陸の人々が寮でルームメイトになることはとても重要で、そこから学ぶことが沢山あります。私が2001年にアジア学

院の学生であった時、最初の3か月はルームメイトとの関係に苦労しておりました。私は彼を上級の牧師として見ており、彼は私がアフリカ出身であることを理由に私を無価値なものとして見ていました。何度も意見が対立した後、ようやく話し合うことができました。そして妥協点を見つけ、卒業する頃にはとても仲の良い友人になっていました。私たちは、誤解や先入観を乗り越えて赦し合い、共に生きることを学びます。

在学中、高見先生から多くのことを学びました。中でも最も貴重な教えは次のものです。「コミュニティで生きていくには、リーダーシップのあり方とは霊的なものなのだということを理解しなければならぬ」。リーダーとして、私たちは裁くのではなく、絶望している人に平和と希望をもたらす人になるべきです。これがアジア学院の目指すリーダーの姿であり、コミュニティに平和をもたらすリーダーを育てることが、アジア学院が平和をつくり出す方法なのです。

(翻訳: 江村悠子)



ひとりひとりが、いのちを大切に、育てている存在であるかどうか、自分自身に問いながら生きる。



## 「土からの平和」

とは

荒川朋子（校長）

人 と人との間に対立が生まれるのはなぜでしょう。一般的に宗教、民族主義、イデオロギーなどの違いが争いを生むと言われますが、実はそれらは表面的なものであって、「土地、食料、水、資源」こそが人間の対立を生む4大原因であると言いつつの方がいます。「土地、食料、水、資源」は人間の生存において無くてはならないものです。人はお腹が空けばイライラするし、攻撃的になります。土地は食料、水、資源を生み出す源であると同時に人間の生存の場を与えます。資源は生活を豊かにします。このうち一つでも奪われると人間は恐怖や絶望を感じ、それが争いの種になるのは明らかです。そしてこれらはすべて「土」、つまり自然、環境と密接に関係します。平和について考えるとき、それは「土」とは切り離せないと考えざるを得ません。

しかし「土地、食料、水、資源」が与えられれば、人は皆平和に暮せるとは限りません。私たちは自らが平和な「存在」であることを願わなければ、本当の平和を獲得し、構築することはできないのではないかと考えます。ではそのためには何が必要なのでしょう。アジア学院は、ひとりひとりが、いのちを大切に育てている存在であるかどうかを自分自身に問いながら生きていくことがとても大事だと考えます。

アジア学院の農場長の荒川治はこのように言います。「人間にとって本当に必要なものは、実はそう多くないのかもしれない。この地球には見事なまでに美しくきれいな水や空気や大地があります。それを汚すことなく、自然の循環の中に身を置いてその一部として存在し、自然に養われていることを知ること。自然の一員として、他のあらゆる生きものと共に生きることを。いのちを育む食べものを愛する人と共に食べることができると。自分のエゴや貪欲から開放され、本当に必要なものを知り、人間を越えた偉大な自然の前に謙虚になること。そして、刻一刻と変わりゆく自然の奥にある永遠に根を張って、魂が救われること。私たちがそのような存在であろうと願うとき、私たちの心の中に平安が与えられ、真の平和の土台が築かれていくのではないかと思います。」

平和は誰かが作るものでも、どこからか降ってくるものでもありません。私たちひとりひとりが「土」に立ち返り、そこから育まれるいのちの尊さを見つめ、自分が平和を願う人間に変えられていくこと。日本のアジアへの侵略戦争の贖罪の願いの上に建てられた学校として、そのような「土からの平和」を実践し、多くの人たちと分かち合うことを希みます。



互いに協力がなければ  
簡単な作業もうまくいかない。  
大切なのは、振り返りと対話。

## 農から生まれる平和



文  
櫻井 将伸  
フードライフ (野菜・穀物)

毎週火曜日と金曜日の朝は収穫の日だ。アジア学院のコミュニティに集う皆は手分けして畑から旬の野菜を笑顔で摘み取ってくる。真っ赤なトマト、隅々までピンと張ったツルムラサキの葉、丸々と大きくなったニガウリ、食べきれないくらいたくさんの実をつけるインゲン豆。生長の早いキュウリはたいてい採るのが遅れ気味で少しばかり大きめだ。去年に収穫したコメは十分すぎるほど蓄えてあるし、今年の田んぼでも良い実りが期待できそうだ。自分たちの畑で育てた自分たちのコメや野菜を自分たちで調理し皆と一緒に食べる幸せ。アジア学院には喜びが満ち溢れている。

現在、アジア学院では31名の学生と、研究科生として2人のトレーニングアシスタントと3人の卒業生インターンが在籍しているが、これにボランティアと職員が加わり、4つのグループを形成して朝夕それぞれ一時間ずつの農作業に向かう。ヤギや豚、鶏など家畜の世話をする者、畑で日々の手入れをする者、あるいは朝夕の食卓に並べる料理に腕をふるう者、役割はそれぞれだ。

異なる文化背景をもつ学生たちは慣れない英語での意思疎通がうまくいかず、ときに意見がかみ合わなかったりすることがある。それでもなお、互いに協力しあわないと簡単な作業もうまくできなくなる。役割を分担している性質上、グループ内のコミュニケーションに乏しく、連携がうまくいかなかった場合、それは如実に現れる。とくに畑で顕著だ。雑草が増え、トマトのわき芽取りやキュウリの誘引、その他細かな栽培管理が行き届かなくなり、とたんに畑が輝きを失っていく。

この時に必要なことは「振り返る」ことだ。いったん立ち止まってみて、これまでの取り組み、仲間のこと、自分自身のことについて考えてみることだ。反省すべき点は謙虚に反省し、周りの仲間たちと正直に対話することからはじめなければ、何も改善されることはないだろう。

人と土と自然との関係性で成果が決まる農という営み。これまで50年という歴史の中で、共に生きるために働き、真摯に対話することを学んだアジア学院は、次の半世紀も確かな平和の内に在ることだろう。



文  
阿部 (チャタジー) マノシ  
学生募集/教務

## Seeds for future

農村の未来をひろく種

2021年はアジア学院にとって、気づきに満ちた1年でした。海外渡航を当たり前に思っていたこと、今となっては地域の潜在力に気づかされたこと、「多様性」はまだまだ広がることに気づきました。これらの教訓とともに、4名の国内学生により研修プログラムを継続することができました。

アジア学院が危機的状況に陥ることとは少なくありませんが、今回は世界的な危機であり、予測不可能、制御不能な要素が多くありました。国内学生のみ、かつ少人数ながらも英語を共通言語とする文化を守り、広い畑や家畜を毎日管理し、国内外からの多くの訪問者を断らざるをえない状況は一苦勞でした。時には様々な問題が重なり対処に追われる日々が続き、アジア学院の目的と使命に沿う難しさも痛感しました。

2022年も前年と同じ不安を抱えてスタートしました。しかし、驚くべきことに海外学生のほとんどは6月までに来日することができたのです。計31人の学生は、それぞれ地域の課題を背負ってプログラムに参加しています。ある者は家畜飼料の自給自足、ある者は気候変動対策、ある者は有機農産物の市場開拓などに取り組みもうと強く前進しています。また、技術的な課題のみならず人々の潜在能力を高めるためのリ-

ダーシップ能力の向上に努める学生もいます。国、ましてや地域の外に出るのも初めての学生もおり、まったく異なった背景や経験を持つ人々と共に生活することは、彼らにとって計り知れない学びとなります。

アジア学院が関わった「日常」に戻るときが来たとしてもこの2年間の教訓はアジア学院の活動理念に深く刻まれ、パンデミック含めその他多くの危機とすらも共生していくでしょう。また、キャンパスにいる人数に関わらず、共に働き、互いを理解しようとする精神は変わらないということがわかりました。また、差別問題、隠れた貧困問題、高齢化による限界集落、難民問題など問題に関わらず人々は常に強い動機と情熱を持ってインパクトを与えようとしていることを学びました。

私たちはアジア学院の研修を通して学生一人ひとりのアイデア、疑問点、つながる行動が「種」のように未来の為になると思っています。植えたその場所で実を結ぶこともあれば、遠く離れた場所で時間をかけて芽を出すこともあります。研修が終わるころには、学生それぞれが「種」として故郷で花開く自らの可能性に気づくことを切に願っています。

(翻訳: 篠田 快)

アジア学院の学生の活動分野は様々です。  
今回は、平和活動や人権擁護活動に携わる2名の学生に、  
平和に対する想いを語っていただきました。



Ngamshel

India

## Ngamshel Ronglo

ンガムシェル・ロングロ

Weaker Sections Development Council / Volunteer Community Mobilizer and Trainer

弱者のための開発協議会 / コミュニティ調整員、指導員



Mordekay

D.R.  
Congo

## Mordekay Mirindi Jonas

モルデカイ・ミリンディ・ジョナス

Peace and Conflict Resolution Foundation / Rural Field Economist

平和・紛争解決基金 / 農村経済専門家

**私**は東北インドの7つの州のひとつ、マニプール州の小さな村で育ちました。マニプールは長い間、部族間の緊張関係から多くの問題を抱えています。警察による不当な殺人、群衆の正義の名のもとに行われる暴行、絶え間ないストライキ、生活必需品の価格高騰、外出禁止令はいま子どもたちにとって当たり前となっており、結果として子どもたちを教育から遠ざけています。私利私欲の利権争いによって愛する人を失った人が多くいる中で、その故郷をよい場所だと人に紹介することはできません。さらに、女性は生きるための基本的な権利を奪われています。家庭内暴力や性的暴行は日常茶飯時となっており、日を追うごとにそれが異常であるという感覚を失わせます。私の故郷は根本的に平和から遠ざかっているのです。この問題を本質的に解決、ましてや危機感を共有することすら簡単ではありませんし、もはや不可能だと思ってしまう時もあります。しかし、不可能ではありません。

私の働くNGOは村々を訪ね巡って人々のニーズを調査し、ニーズに応じて職業訓練や意識向上などの様々なプロジェクトを行っています。中でも私は主に農業を通じた支援に従事しています。種子の無償配布や有機農業技術の訓練を行うことにより人々の仕事の機会を増やし、生活を向上させるのです。人々が自分たちの持つ権利を理解し、普通の生活を送れるようにすることが、私たちの夢です。

(翻訳：篠田 快)

**子**どもの頃から、平和な環境で暮らしたいと願っていました。平和を作り出す人になることが私の一番の夢でした。

コンゴ民主共和国ではこれまで25年以上も戦争や大虐殺などの残虐行為が続いており、直接・間接を問わず紛争による死者数は今日にも1000万人を超える勢いです。私の暮らす東部では特に深刻であり、私の父と兄も戦場で亡くなりました。人々は避難先を求めて移動しましたが、そこでは病気、飢餓、トラウマ、栄養失調などあらゆる危険にさらされました。女性や子どもは特に大きな犠牲者です。

私が働く平和・紛争解決基金は、長年の戦争の後に平和を実現するために様々な人々に働きかけて、コミュニティを変革する機会を私に与えてくれました。私が担当しているのは、様々な村の立場の弱い人々を起業や農業の分野で支え、コミュニティを力づけることです。

私はいつも、どんなに激しい紛争や殺戮、傷などがあっても、愛と赦し、対話、正義、分かち合いに基づいた真の平和は必ず勝利すると確信しています。皆が努力を重ね、あらゆる層に働きかけ、意識を高め、早い時期から平和のための教育を始めることによって、平和に到達することができるのです。マタイによる福音書5章9節に「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」とあります。平和なくしては、土地も国家も人間社会も発展しないのです。

(翻訳：江村 悠子)



アジア学院での研修中に「土からの平和」という言葉に出会って以来、自身の活動の中でこの言葉を精力的に実践し、また広めているエマニュエルさん（アジア学院ネーム：ピコロ）。彼が「土からの平和」に抱く想いを聞きました。

Listening to the soil

## 土に耳を傾けて

農民と牧畜民の紛争を歌と踊りで仲裁



ケニア

Pikolo

Emmanuel Baya

エマニュエル・バヤ（2009年卒）

Founder, Magarini Children Centre & Organic Demonstration Farm  
マガリニ児童センター・有機実験農場 創設者



コミュニティの人々との対話



マガリニ児童センターの子どもたち

今 この世界では、多くの人が平和を希求しながらも、政治問題や部族間・国家間の戦争、異常気象、そして貧困や飢餓といった過酷な状況に苦しんでいます。この危機的状況下で生き残ろうとする時、意思決定の軸が「私たち」から「私」に変わってしまっていないか、互いに愛し思いやる心を忘れていないだろうか、自分自身を顧みつつ、人類の未来を憂えることがあります。

私たちと対極の存在ともいえる土は、私たちを無条件に愛し、ほとんどの人には聞こえない小さな声で囁きかけてきます。「人間が隣人、土、自然を愛し十分に配慮する時、平和は土から生まれる」と説いているかのように。

古くから人々は国境や地域の枠を越えて共に暮らし、またコミュニティは多様な文化を認め合って形成され共に成長することを理想とし、互いを気遣い、土と自然の声を聞き、平和な生活を送ってきました。人類と生態系を繋ぐ土が全ての生命を支え、土と共に生きる農民は人々の命と世界の平和に貢献してきました。

私が実体験を通して土と平和の関係を意識したのは、牧畜民と農民の間で生じた紛争を仲裁したときのことです。牧畜民が家畜を畑に放ち農作物を荒らしたという事態に対し、外から来た NGO や政府関係者たちは、これは宗教的紛争であるとする一方、私はこの問題の核心を見つけるため、土に耳を傾けました。すると土は私に語りかけました。「牧畜民も農民も、全て

を土に委ねている」と。私は牧畜民の一人を訪ね「土の子どもとして仲裁をしたい」と申し出たところ、長老たちが感銘を受け、私の言葉と彼らの文化を融合し音楽で表現してはどうかと提案しました。

私は牧畜民の作曲家に、農民にとって自分たちが栽培した作物がどれほど大事なのか、そして私たち全員が互いに尊重し、愛することができれば共に生きることができる旨を伝えました。

そして農民側である自分のコミュニティに戻り、牧畜民が牛なしでは生きられないこと、共に暮らすことの重要性を伝える歌を作ろうと提案しました。その後、私たちはコミュニティの全ての人々を集めて歌とダンスを披露しました。農民は牧畜民の言語で、また牧畜民は農民の言語で歌いました。それは感動的な瞬間でした。このことを通して両者の距離は縮まり知恵を出し合い、牛が草を食べに行く場所を定め、また農作物に影響をもたらさないことを約束しました。農民は作物だけでなく牛の世話もし、牧畜民は農作物を大事にしました。平和と愛の種がこれら2つのコミュニティの中心に植えられたのです。

文化や社会背景が異なっても、農業生産者として共に暮らす私たちは、支え合う必要があります。自然に感謝し、異なる文化の人を尊重し受け入れます。土に耳を傾け、協働し労わりあうことで、人々の心に平和の種は蒔かれるのです。

（翻訳：佐藤 裕美）

# ご支援に感謝いたします

2022年5月1日～6月30日（敬称略・順不同）

寄付金がアジア学院に入金された日に基づき掲載しております。入金日は、口座振替の場合はご決済の1ヶ月後、クレジットカードの場合は2ヶ月後です。

## サポーター寄付 一般寄付 寄付者御芳名

【北海道】久世礼子 高橋浩二 三橋修（公）平取聖公会  
 【青森県】木村幸子 【岩手県】澤谷常清 【宮城県】小林和夫  
 門間清 【秋田県】大友武夫 【山形県】須藤フミ 原田加矢乃  
 【茨城県】岩田朗 大柳綾子 島崎小乙里 宮崎昌久・せい子  
 横川浩・容子 【栃木県】阿久津啓司 阿久津正幸 鮎瀬征夫  
 飯島恵子 飯塚仁美 飯沼一浩・淳子 石井主・信子 伊藤順子  
 植竹伸一 大久保允寛 大谷雅代 大塚宏一 大柳由紀子  
 小倉一郎・恭子 鍛冶美奈子 片桐洋史 川上聖子 吉川宗芳  
 君島希枝子 君嶋満恵 木村裕子 郡司いく子 小久保久子 小島美香 駒庭千秋 駒場昌子  
 齋藤てる子 坂入貴子 佐藤範明 沢谷千亜紀 嶋田房義 田中淳子 長嶋清 長瀬美香  
 西田京子 丹羽芳雄 林真智子 潘炯旭 伏見卓 古内辰子 McCurley 里美 三宅隆史 村田榮  
 森良子 森川有理 八木湧子 矢嶋美華 八巻恵美子 山本ミチ子 渡辺祐子（教）宇都宮  
 東伝道所（キ）宇都宮松原教会（カ）厳律シスター会 那須の聖母修道院（教）那須塩  
 原教会（教）西那須野教会 藤沼会計事務所  
 【群馬県】亀田瑋子 亀田慎也 永井順子（学）新島学園中学校・高等学校  
 【埼玉県】東治子 北野啓子 小西さい子 武真人 千村雅信 戸井田紗耶香 Bayles John  
 眞壁日史郎・泰子 吉崎玲子 【千葉県】石崎利夫 太田賢 金子聡子 齊藤祐子 佐久間 健  
 佐藤伊一郎 佐藤豊美 山崎尚子 山本栄子 八街グレイス教会 【東京都】青山比呂乃  
 浅川ズャーリッチ葉子 阿部哲夫 粟谷しのぶ 市川創 岩切勉 鶴崎創 梅澤よび  
 大野綾子 大橋祐治 金子智雄 加納貞彦 柄澤真理子 菊池泰子 久世陽子 栗山昌子  
 黒田俊介 小泉充也 小林元子 佐藤太郎 佐藤照子 佐藤雅子 柴崎等 鈴木隆・美智子  
 須田 毅・松子 関口博・美樹 高野美恵子 高橋理佳 竹野裕子 田中淑子 費川治樹  
 浜田めぐみ 林俊行 原かおり 福嶋美佐子 牧甫 松尾みどり 松本いく子 丸山正文  
 三田町子 三井田純子 森哲也 森川恵美子 山田正 八幡真也 渡辺悦子 渡辺多恵子  
 Women's Conference（教）学生キリスト教友愛会（学）国際基督教大学高等学校  
 （一財）JEL A 東京南ロータリークラブ 東洋英和女学院中高阶宗教委員会  
 （一財）新倉会（宗）日本基督教団（教）原宿教会 子どもの礼拝 ライトハウス新宿  
 チャーチ（学）立教女学院キリスト教センター 【神奈川県】安積力也 天野潤 荒井明子  
 石田伊志子 今川信夫 今田多恵 若澤裕基 梅澤昌子 海老根智仁 遠藤抱一 大石三枝子  
 尾崎久美 尾崎正夫 金子尚子 川上静子 佐藤牧 進宏 関根ゆかり 中本尚孝 鍋嶋那津子  
 西岡伸子 本田忠行 彌重仁也 横野千晶 吉田昌夫（教）鎌倉雪ノ下教会  
 【新潟県】荒井真理（教）関東教区教会婦人会連合 【石川県】依友恵 【山梨県】賀川一枝  
 藤井伸 【長野県】青木栄作 植松誠・三千代 【岐阜県】国枝春己 田川徹 山信彦  
 【静岡県】武井陽一 松本伸吉 山下清二 【愛知県】荒川勉 ハイチの会  
 【滋賀県】太田宣子 【京都府】上田祐未 櫻井鋭子 千田悦子 細井順（特活）木野環境  
 【大阪府】大本和子 見満紀子 陳野友洋 林貞子 山下紘正 【兵庫県】黒田喜久子 山本 愛子  
 神戸ユニオンチャーチ 【岡山県】岡崎優子 【広島県】野村篤子 【山口県】片山由美子

【香川県】木村修久 【愛媛県】泉川君子 河井宇史 【福岡県】中島葉々子  
 【佐賀県】英語教室もと 【熊本県】山根誠之 【大分県】鶴丹谷公代 カutting美紀  
 【鹿児島県】大谷ともよ 【沖縄県】小笠原春野（公）沖縄教区宮古聖ヤコブ教会  
 【海外】LeeSeungHee オランダ日本語聖書教会 カナダ合同教会 合同メソジスト救援委  
 員会（UMCOR）合同メソジスト教会世界宣教（GBGM）

## 寄付金 実績状況

5月	2,860,701円
6月	5,770,612円
合計	8,631,313円

## 寄付金領収書について

口座振替・クレジットカードでご寄  
付頂いた場合、所得税法により領収  
書の発行及び領収日は、アジア学院  
に入金された日とさせていただきます。

## 書き損じハガキ 寄付者御芳名

【北海道】下田尊久 【宮城県】今野裕美子 根廻頼子  
 【福島県】堀江信 【茨城県】金井美紀 【栃木県】赤羽浩子  
 阿久津啓司 石井主・信子 君島学 武田誠 秦野良厚 榎山和子  
 古内辰子 【群馬県】永井順子（教）吾妻教会女性の会  
 【埼玉県】井出誠 彌 栗原伽奈 武真人 細川敦子  
 （公）大宮聖愛教会 【千葉県】小林明子 佐藤衛利子 竹内智子  
 （バ同）運河キリスト教会 【東京都】小鴨迷夫 小見寿 加納貞彦 佐波吉男 鈴木節子 須田松子  
 関口博・美樹 長尾愛子 本多峰子 三井田純子 宮本和美 横田桂子（教）大宮前教会 天の  
 魚出前プロジェクト（教）中目黒教会 目白ヶ丘幼稚園 【神奈川県】稲田信子 岡林みどり  
 高田耕多 西川美智子 宮山久美 矢野敬子 【大阪府】金森麻巳 【兵庫県】垂井美子

## 一品寄付 寄付者御芳名

【山形県】原田俊二・加矢乃 【福島県】堀江信 【茨城県】目黒齒  
 科医院 【栃木県】石井信子 久留生夏江・利美 島田毅 清水益夫  
 千保美奈子 高村京子 野崎威三男 棟形さつき 黒磯福音教会  
 【埼玉県】鈴木祐子 柳原さつき（公）大宮聖愛教会  
 【東京都】福嶋美佐子 宮本和美 八幡真也（教）日本キリスト教団  
 全国教会婦人会連合にじのいえ信愛荘協力委員会奉仕部  
 【神奈川県】鈴木尚子 松本栄子 【静岡県】松村芳男  
 【三重県】豊留にこ  
 （医）医療法人（医社）医療法人社団（学）学校法人（カ）カトリック（株）株式会社  
 （教）日本基督教団（キ）日本キリスト教会（公）日本聖公会（公財）公益財団法人  
 （公社）公益社団法人（財）財団法人（社）社団法人（宗）宗教法人  
 （特活）特定非営利活動法人（バ同）日本バプテスト同盟  
 （福礼）日本福音ルーテル教会（有）有限会社



## レポート

# アジア学院フレンズデー

多くの人が訪れ、笑顔が溢れた一日

雨続きの中で眩しい青  
空に恵まれた7月18日  
（月・祝）、初めての「ア  
ジア学院フレンズデー」  
を大盛況のうちに終える  
ことができました。

フレンズマルシェでは  
卒業生、元ボランティア、  
農産物のお客様、アジア  
学院ブースなど、計12店  
舗が参加してこだわりの  
食事や有機野菜、フェア  
トレード手工芸品などの  
販売やワークショップを  
行い、大変賑わいました。  
サポーターの集いでは研  
究科生（卒業生）や日本  
人卒業生・元ボランティ  
アの熱い想いに耳を傾け、  
活発な意見交換の場とも  
なりました。音楽ライブ  
やキャンパスツアーも好  
評でした。

所々で旧友との再会を  
喜ぶ声も聞こえ、笑顔溢  
れる一日となりました。  
皆様のご参加によって「フ  
レンズデー」（「友だちの  
日」）が実現しましたこと  
に、心より感謝申し上げ  
ます。

（文）江村悠子

50th  
**Harvest Thanksgiving Celebration**  
第50回 収穫感謝の日

今年は1日だけ!

2022 / **10 / 15** / Sat ライブ配信あり

午前の部 9:30 - 12:00 (9:00 開場) / 午後の部 13:00 - 15:30 (12:30 開場)

予約制・2部入替制・人数制限あり(各部80名まで ※0~3歳はカウントしません)

会場 アジア学院(栃木県那須塩原市槻沢442-1)

お食事券込み入場料 大人1,000円 4歳~小学生500円

### 収穫感謝礼拝



毎年恒例、豊かな収穫に感謝する

アジア学院最大のイベントです。

今年は再び皆様をキャンパスに迎えて

開催いたします!

先着160名限定の予約制となりますので、

どうぞお忘れなくご予約ください。

### 多国籍オーガニック料理



### ステージパフォーマンス



#### 【ご予約について】

予約開始日: 9月15日(木) 10:30

できるだけ、アジア学院ウェブサイトの「第50回収穫感謝の日」のページ(右記QRコード)よりお申し込みください。お電話でも承ります。

TEL: 0287-36-3111(平日9:00-17:00)

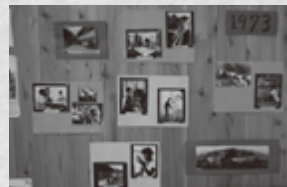


#### 【一品寄付バザーについて】

新品または新品相当の美品の以下の物品を募集いたします。

- ・タオル、鍋、台所用品、贈答品、手芸品など
- ・食品(未開封で賞味期限が切れていないもの)

### 展示



and more!

### アジア学院太陽光発電レポート

期間	発電量 kWh	CO <sub>2</sub> 排出削減量 kg-CO <sub>2</sub>
2022/5/1~6/30	3,600	1,622 = 成木: 116本分 石油: 817ℓ分
累積 2020/10/1~	32,949	14,844

